

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號六第 卷九十二第

行發日一月二十年四和昭

論叢

地租に於ける累進 法學博士 神戸 正雄
 運賃負擔力の表現としての容積と重量 經濟學博士 小島 昌太郎
 平均生産力説について 文學博士 高田 保馬

說苑

貨幣價值決定原理の一考察 經濟學士 柴田 敬
 所謂公開市場取引に就いて 經濟學士 島本 融
 明治政府の貸附金 經濟學士 吉川 秀造

講演

國民的産業としての生糸 法學士 勝山 勝司

雜錄

地方税不動産取得税 經濟學士 安田 元七
舊會計士 斗南士族の就産 經濟學士 堀江 保藏
 統計拾穗抄 法學博士 財部 靜治
 株價指數に就いて 經濟學士 益田 熊雄
 近著外國經濟雜誌主要論題

附錄

本誌第二十九卷總目錄

(禁轉載)

說

苑

貨幣價值決定原理の一考察

柴田敬

一序

茲に貨幣の價值とは所謂貨幣の購買力を、換言すれば所謂物價の逆數を指す。貨幣の價值は如何にして決定されるかに關する研究を、私は今、資本主義社會の根本的機構の分析の爲めの一つの準備行爲として試みるのである。單なる貨幣の價值の研究としては殆んど無用と思はれるであらう所の數式化を努力したのは此の爲めである。

便宜上次の様に問題を制限する事にする。

- 一、貨幣はすべて、而して問題の期間内には只一回だけ、流通する。
- 二、如何なる形態の信用も行はれない。
- 三、一種類の金貨のみが流通する。

四、完全なる自由鑄造壞制が確立して居る。従つて理論的には、一定量の金は常に一定量の貨幣に等しい。

五、商品はすべて、而して問題の期間内には只一回だけ、賣買される。

六、他の貨幣社會との交渉を有せざる孤立せる貨幣社會である。以上。

以上掲げたる諸事情の變化を考慮に入れたるや否や、それを考慮に入れる場合それが有すべき意味を如何に解したるや、によつて無限に多様な貨幣價值學説は、問題を上述の如く限定する事によつて凡そ五種の根本的思想型となされる。一、生産費説、二、數量説、三、主觀價值説、四、懷疑説、五、綜合説。以下順を追ふて之等諸説を検討しつゝ、私見に及ぶつもりであるが、便宜上、主觀價值説は數量説を取扱ふ序に論及する事にする。

二 生産費説(又は客觀價值説)

茲に生産費説とは、貨幣の價值の決定根據を全然金の生産費に求める所の學説を謂ふのであるが、以下に於いて私は、此の意味の生産費説の一つとしてマルクス説を論評する事にする。

彼によれば、金は労働時間の體現物としてのみ他の商品の等價物となり得る。即ち金は、他のあらゆる商品と同様、その生産の起源において商品である。ここでは、金の相對的價值と、鐵その他すべての商品の相對的價值とは、それ等が相互に交換されるその數量で表はされる。しかるに、此の作用は流通過程にあつては既に前提されてをり、商品それ自身の價值は商品價格におい

1) Marx, Karl: Zur Kritik der politischen Oekonomie, 1924, S. 50. 猪俣氏譯一二六頁。Vergl. Kautzky, Karl: Sozialdemokratische Bemerkungen zur Übergangswirtschaft, 1918, S. 110-2.

て與へられてをる。²⁾ だから貨幣が多く或は少く流通するから價格が高く或は低いのではなく、價格が高く或は低いが故に貨幣が多く或は少く流通するのである。³⁾

然らば、金の購買力(貨幣に對するそれとなく、一般商品に對する)は、「其の生産の起源に於いて」何によつて決定されるであらうか。それは、今假りに勞働價值説を許すとするも、理論的には正常的需要線と正常的供給線との交叉する所に決定される、と言ふ事は認められねばならぬ。而して茲で看過してならぬ問題は、所謂金の需要線とは何を意味するか、と言ふ事である。今假りに、需給金量 G_0 を示すに x 軸を以てし、貨幣従つて金の購買力 K (一般商品量を以て言ひあらはされたる) を示すに y 軸を以てする圖表に於いて、地金としての金に對する需要金量 G_0'' が描く線 (a b 線) を

$$G_0'' = 4 - 2K \dots \dots (1)$$

金の供給量 G_0' が描く線 (c d 線) を

$$G_0' = \frac{25K - 5}{4} \dots \dots (2)$$

と假定する。(直線を用ひたのは問題を簡單ならしむる爲めである)。今若し所謂金の需要線とは、地金としての金に對する需要、換言すれば貨幣としての金に對する需要を含まざるもの、が描く線だとすれば、

$$G_0' = G_0'' \dots \dots (3)$$

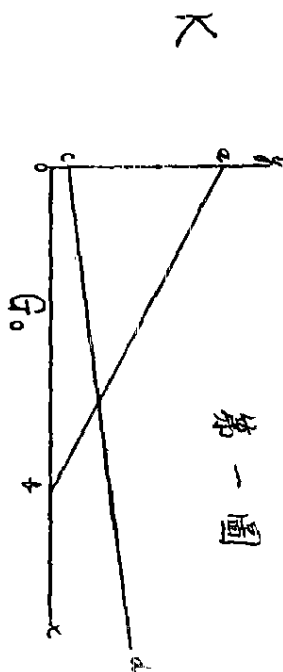
2) Marx, S. 78, 49-50, 153-4, 166. 猪俣氏譯一六六頁。Vgl. Kautzky, S. 11. Gold, Papier und Ware. Neue Zeit, Bd. XXX, 1, 1912, S. 892.

3) Marx, S. 97. 猪俣氏譯一八九頁。

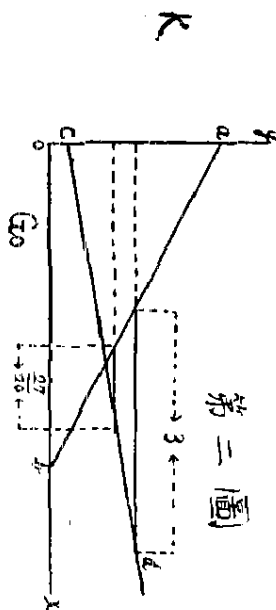
であるから、金の購買力Kは

$$K = \frac{I}{II} \dots \dots \dots (4) = (2) \text{に} (3) \text{を代入} - (1)$$

である。今之れを圖表を以て示すならば、



となる。即ち「鐵その他すべての商品の場合」と何等異なる。然しそれでは、貨幣たるべき金は何處から來るのであるか説明されぬ。従つて所謂金需要とは、地金としての金に對する需要のみならず、貨幣としての金に對する需要をも含むものであらねばならぬ。而して貨幣としての金に對する需要は、今貨幣の購買力がすべての貨幣單位について同一である事を許すならば、次の如き姿に於いてあらはされねばならぬ。



即ち今假りに、貨幣としての金の需要を3とすれば

$$Go' = Go'' + 3 \dots\dots (5)$$

であるから、金の購買力Kは

$$K = 1 \dots\dots\dots (6) = (2) \text{に} (5) \text{を代入} \text{---} (7)$$

であり、又假りに $\frac{27}{20}$ とすれば

$$Go' = Go'' + \frac{27}{20} \dots\dots (7)$$

であるから、

$$K = \frac{4}{5} \dots\dots\dots (8) = (2) \text{に} (7) \text{を代入} \text{---} (11)$$

である。即ち貨幣としての金の需要が決定せられる事によつて始めて、金の購買力が決定せられるのである。然らば貨幣としての金の需要は何によつて決定せられるか。それは生産費説によれ

ば、貨幣の價值によつてある。茲に於いて生産費説は循環論に陥る。

我々は此の場所に於いて、金の生産關係及び地金としての金の需要が、金の購買力決定に對して如何なる意味を有するかを、確定して置くのを便とする。

假りに、金の生産費が低下し、供給金量 G_0 の描く線が

$$G_0' = \frac{50K - 5}{4} \dots \dots \dots (9)$$

となるとするならば、金の購買力 K は、貨幣としての金の需要 3 の時には

$$K = \frac{33}{58} \dots \dots \dots (10) \quad K (5) \text{を代入} (11)$$

であり、27/29 の時には

$$K = \frac{132}{290} \dots \dots \dots (11) \quad K (7) \text{を代入} (11)$$

である。即ち金の生産費の低減無かりし場合に比して、(10)に於いては25/58、(11)に於いては10/29だけ、金の購買力は減少する事になる。

而して、地金としての金の需要の低減も亦、金の生産費の低減と同一方向の結果を來すと言ふ事は、自明である。即ち今假りに、地金としての金の需要量 G_0 の描く線が低下し

$$G_0'' = \frac{16 - 33K}{4} \dots \dots \dots (12)$$

となるならば、金の購買力 K は、貨幣としての金の需要 3 の時には

$$K = \frac{33}{58} \dots \dots \dots (13) \quad K (2) \text{を代入} (12)$$

となる様に。

以上によつて吾々は、貨幣としての金の需要量が與へられたる場合に於ける、貨幣價值決定原理を窺ふ事が出来るであらう。

三 數量說附主觀價值說

茲に數量說とは、貨幣の價値の決定根據を全然數量關係のみに求める所の學說を言ふ。此の意味の數量說には、商品の數量を顧みる事なく、單に貨幣の數量のみを考慮に入れるもの、及び、金と貨幣との區別を看過し、共に貨幣と看做すもの、も含まれ得るが、それ等は茲に論ずるまでも無い。以下に於いて私は、貨幣の價値は貨幣の量と商品の量との比例關係によつて決定される、となす說の一つとして、ヒューム說を檢討する事にする。

彼によれば、すべての商品の價格は商品と貨幣との間の割合によつて決定される、と言ふ事は、殆んど自明なる公理と思はれる。即ち商品を増加すれば商品は安くなるし、貨幣を増加すれば商品は高くなる。だから一國だけに就いて見るならば、貨幣の増加は善悪何れの作用をも有しない。それは恰も、字數少くして濟む所のアラビヤ數字を用ひないで、字數を多く要するローマ數字を用ふる事が、商人の簿記に變化を來さないのと同じである。否、貨幣をより多く要すると言ふ事は、ローマ數字と同じ様に、寧ろ不便であつて、其の保藏運搬がより面倒になるのである。

數量說の第一の難點は、相互に質を異にした所の無數の商品の使用價値は如何にして合計され

4) Hume, David: Essays and Treatises on several subjects. Vol. 1. p. 301.

5) Hume: p. 293.

得るか、そしてそれと一國に存する貨幣量を如何にして必然的關係に在りと見る事が出来るか、を明かに爲し得ないと言ふ點に存する。⁶⁾

而して此の點に關して顧らるべきものは、主觀價值説である。以下、主觀價值説の一つとして、ウイノザーの説を批判する事にする。

彼は先ず、人的交換價值 *der persönliche Tauschwert* と國民經濟的交換價值とを區別する。後者は前者から導き出されたものである。前者は一財と交換して他の財が得られると言ふ事によつて生ずる所の間接の利用價值である。所與の事情に従つて、各個經濟の支出限界の域にある所の財の使用價值、即ち家計の限界効用 *der Grenznutzen des Tauschwertes* が貨幣單位の人的交換價值を決定する。各個經濟が充足しなければならぬ所の全欲望狀態と、家計の爲め使ふ事の出来る全貨幣量とが、家計の限界効用にあらはれる。⁷⁾

國民經濟的貨幣價值は、すべての人が承認する所の、人的貨幣價值の一般的主觀的切斷面 *der allgemeine subjektive Abschnitt* である。それは、一般物價に従つて貨幣が國民經濟過程に於いて有するに至る通用性、として定義される。⁸⁾

欲望は變轉常無きものであるから、特定個人の一定期間の欲望全體を、其の個人の所有貨幣量と對立せしめると言ふ事は、不可能である。然し貨幣と商品との對立は、單なる機械的なるそれではなくして、主觀的評價作用を通じてのそれである事は、疑はれ得ない。數量説に於いて前提される所の貨幣と商品との對立は、主觀的評價から其の數的表現に至るまでの心理過程のあとづ

6) Vgl. Soda, Kiichiro: Geld und Wert, 2. Aufl. S. 22-4. Marx, a. a. O. S. 171-2. Das Kapital, 10. Aufl. 1922. S. 88. Fussnot.

7) v. Wieser, Friedrich Freiherrn: Grundriss der Sozialökonomik. 2. Aufl. 1924. S. 163-4.

8) " " S. 187-8.

けによつて始めて説明される。只問題になるのは、貨幣の主觀的評價は既に貨幣の購買力を前提して居ると言ふ點である。シュムペーターは、其他の點に於いては主觀價值説を認めつゝ、次の様に論じて居る。曰く。

「貨幣は購買力を持つて居る、而して其の故にそれは其の所有者によつて評價される。だから、貨幣の購買力を、賣買當事者の貨幣及び商品に對する主觀的評價から説明しやうとする事は、循環である。蓋し、賣買當事者の貨幣に對する評價は、全く反射的のものであるから。それは既に貨幣と商品との一定の交換關係を前提して居るから。即ちそれが説明しなければならぬ所の其の購買力を前提して居るから」と。

然し貨幣に對する主觀的評價は、貨幣の購買力を前提しつゝ、貨幣の購買力を作つて行くのである。即ちウイザーが論じてゐる様に「價格から導き出された所の人的交換價值は、反對に、價格の構成に作用する」¹⁰⁾「効用の表現に何程の貨幣單位量が用ひられるか、と言ふ事は、先驗的には決定されない。それは常に歴史的に決定される。各國民經濟は各時點に於いて貨幣價值を與へられて居る、そして彼等は歴史的連續性の中に於いて、與へられたる状態から貨幣價值を更につて行くのである。」¹¹⁾

即ち貨幣の價值は言はゞ螺旋的發展をなすものであつて、それをして單なる循環に終らしめずして、斯くの如く螺旋的發展をなさしめる要因の一つが、主觀的評價作用である事は、疑ふ事を得ない。然しながら、貨幣に對する主觀的評價が、貨幣の價值決定に作用するのは、それ／＼の

9) Schumpeter, Joseph: Das Sozialprodukt und die Rechenpfenige. u. s. w. Archiv für Sozialwis. u. Sozialpol., 44. 1917-18, S. 646. vgl. S. 647, 651.

10) Wieser, a. a. O. S. 165.

11) „ 188.

價格に於いて一般商品を購買する爲めに支出されるであらう所の貨幣量を變化せしめる點に存するのであり、我々の假定では、社會に存在する貨幣はすべて而して只一回だけ流通するのであるから、假定そのものが既に特定の主觀的評價を前提して居るので、今更此の問題を導き入るべくもないのである。

ウィーザーは更に「市場に於いて支拂はれる總價格のうち、消費價值 Konsumwerte の購買の爲めに支拂はれる所のものが、貨幣の交換價值を決定する、蓋し、生産手段を購買する爲めに支拂はるゝ所のものは、それから導き出されたものであるから」¹²⁾となしてゐる。然しながら、假りに、生産手段の價格はそれによつて生産される消費手段の價格によつて決定される、とするも、一定の期間内に於ける貨幣の交換價值は、其の期間内に於ける消費手段の價格によつて決定される、とは言はれ得ない。蓋し、一定期間内に於いて購買される生産手段は、必ずしも其の期間内に於ける消費手段の生産の爲めに購買されるのではなく、次の期間に於ける消費手段の生産の爲めにも購買せられるのであるから、然る限りに於いては、其の期間内の消費手段の價格は、生産手段の價格を決定すべき諸因素のうちの單なる一因素に過ぎない事が、明かであるから。而して此の事は、同一期間内に於ける生産手段對消費手段の關係に就いても言ひ得られる事であり、且つ、生産手段が一定の價格で販賣出來ると言ふ事が、其の生産手段の生産者及び其の下に備はれる労働者の所謂貨幣所得を規定し、其の事が消費手段の價格を規定する作用を有する事、及び、生産手段購買の爲め既に一定の資本が投せられて居ると言ふ事が、それによつて生産される消費

12) Wieser, a. a. O. S. 188. Vgl. Schumpeter, a. a. O. S. 647.

手段の價格決定に影響を有する事、を看過する事は出来ない。ウィーザーは上述の彼の所論から更に進んで、「進歩も退歩も無い國民經濟 ständige Volkswirtschaft に於いては、物價は、一方では新に獲得される自然的消費價值 naturale Konsumwerte によつて、他方では貨幣所得によつて、決定される」となして居る。今、さきに論評したる點を看過するならば、此の事は一應認められるであらう。然しながら、それは彼も認めてゐる様に、進歩も退歩も無い國民經濟に於いては、資本の擴張再生産の行はれる貨幣社會——それこそ現實の貨幣社會の姿である——に於いては、かゝる立言は妥當しない。蓋し、一、所謂貨幣所得の一部分は資本化され、消費手段の購買に當てられないのであるから、二、其の點を看過するとするも、一定期間内に於いて消費手段の購買の爲め支出される所の貨幣は、必ずしも其の期間内に收得される所謂貨幣所得に限らず、前期間より其の期間に承け繼がれる貨幣を含むはずであり、又、一定期間内に收得される所謂貨幣所得は必ずしも其の期間内に支出されるとは限らず、次の期間に持ち越されるものがあるはずであつて、前期から承け繼がれる貨幣額と後期へ持ち越される貨幣額とは、殊に擴張再生産の場合には、一致し難いものであるから。殊に、シムムペーターの如く「靜止的均衡状態に於いては、すべての亨樂財の價格はすべての生産財の價格に等しく、兩者はいづれも、總貨幣所得額に等しい」となすに至つては、それは極端なる獨斷論に過ぎない。此の事は、資本主義社會の機構に於ける貨幣の地位の究明によつて充分に明かにされ得ると思ふ。

以上我々は、主觀價值説を通ずる事によつて數量説の根本的缺陷の一つが補はれ得べき事を見

13) Wieser, a. a. O. S. 188.

14) Schumpeter, a. a. O. S. 634-5.

たのであるが、數量説は更に他の一つの根本的缺陷を藏する。蓋し、數量説の説く所に従つて貨幣の價值が決定せられる爲めには、一定量の貨幣量が供給されて居る事を前提する。そこで此の關係に於いては、問題はどれだけかの貨幣量が供給されるかに懸つて居る。然るに、どれだけかの金が貨幣として使用されるかは、實に、貨幣の購買力がどれだけであるかを前提して始めて決定されるのである。即ちさきに用ひたる例に従つて

$$Go' = 4 - 2K \dots\dots\dots (1)$$

$$Go' = \frac{25K - 5}{4} \dots\dots\dots (2)$$

とするならば、新に貨幣として供給される金の量は

$$Go' - Go'' = \frac{33K - 21}{4} \dots\dots\dots (14)$$

である。即ち今假りに

$$K = 1 \dots\dots\dots (15)$$

とするならば、新貨幣としての供給金額は

$$Go' - Go'' = 3 \dots\dots\dots (16) = (14) \text{に} (15) \text{を代入}$$

であり、

$$K = \frac{4}{5} \dots\dots\dots (17)$$

であるならば、

$$Go - Go'' = \frac{27}{20} \dots \dots \dots (18) = (14) \text{に} (17) \text{を代入}$$

である。金の供給線・地金としての金に對する金需要線・等の變化の場合には、上述の所論から容易に推論されるのであるから、茲には贅するを要しないであらう。即ち數量説に従へば、貨幣の價值は貨幣の數量を俟つて決定されるのであるが、其の貨幣の數量は貨幣の價值を俟つて始めて決定されるのである。即ち數量説も亦循環論法に陥る。

數量説に就いては、尙は注意を要する事がある。それは數量説に於いては、貨幣の價值が與へられる前に、商品の量が與へられて居る、と前提するのであるが、換言すれば、社會に流通する貨幣量の増減にかゝらず生産される商品量は一定してゐると前提するのであるが、日常の經驗からすれば、價格が高くなればなるほどそれだけ多く生産され、價格が低くなればなるほどそれだけ生産は縮少される、と考へられると言ふ事である。それは一應、一は全體性を觀察し、他は局面を見るから起る見解の相異だと考へられ得る。蓋し、部分的に見れば、價格が高くなればなるほどより多く生産され、反對の場合には反對である、様に見えても、全體として見れば、價格が上騰すると言ふ事は、全體的に原料其の他のもの、騰貴をも意味するのであるから、生産技術に何等の變化無き限り、生産の有利限界を規定する所の生産量（此の事に就いては尙は精密なる分析を要するが、他日に譲る）には何等の變化をも來さない、と見られ得るから。然しながら、一定の期間に就いて見れば、其處で生産の爲めに消費される生産財は、其の期間内に於いて始めて

購入されるものゝみに限らず、其の期間前に於いて既に購入されたものもあるものであり、而してそれは、それによつて生産されるものが一定の價格以上である場合には有利に使用され、一定の價格以下である場合には、寧ろ使用せずして放置されるのである。然る限りに於いて、物價騰貴は生産擴張と、物價下落は生産收縮と、密接なる關係を有する。従つて今假りに、賣買商品量 Q を表はすに x 軸を以てし、物價 E 、 K を表はすに y 軸を以てする圖表を用ふるならば、賣買商品量 Q の描く線は、例へば

$$Q = 10 \dots \dots \dots ef \text{線}$$

ではなくて、寧ろ例へば、

$$Q = \frac{15}{K} - 5 \dots \dots \dots gh \text{線}$$

であらう。従つて、貨幣需要量 Q 、 K の描く線も、例へば

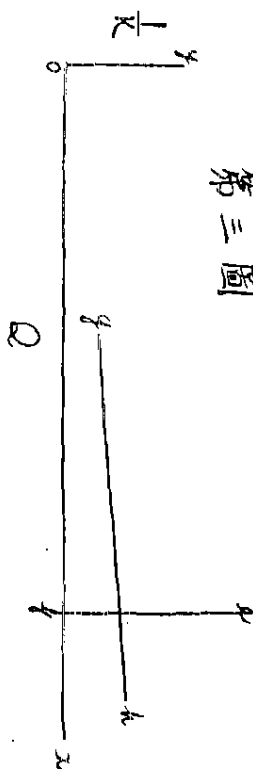
$$\frac{Q}{K} = \frac{10}{K} \dots \dots \dots ef \text{線}$$

ではなくて、寧ろ例へば、

$$\frac{Q}{K} = \frac{15}{K^2} - \frac{5}{K} \dots \dots \dots gh \text{線}$$

であらう。(直線を用ひたのは、茲でも、問題を簡單ならしむる爲めである。)今之れを圖表を以て示せば次の如くなる。

第三圖



四 懷疑 說

如何なる程度のものを懷疑説と呼び得るかは、問題である。茲には假りに、エルスター説を簡單に論評するに止める。

彼は交換と賣買とを區別して言ふ。A・BがGa・Gb財を相互に交換するとすれば、それは先ずAのみに就いて見れば、

一、AはGb財をGa財よりも、より高く評價する。

二、AはGa財と交換して得らるべき他の如何なる財よりも、Gb財をより高く評價する。

三、Aは交換に於いてGb財を得る爲めに、其代價として讓渡する事を要する如何なる財より

も、Ga財をより低く評價する。

然るに貨幣に關しては、經濟者はたゞ、

一、一定量の貨幣を以て、より多くの價值ある財を購入する事は出来ないだらうか、

二、所要の財を、もつと少量の貨幣を以て購入する事は出来ないだらうか、

と言ふ事を考へるに過ぎない。即ち各個の經濟者の心理を觀察しただけでも、賣買は交換の一種でなくして、本質的に全然異つた事象である事を證明する事が出来る。¹⁵⁾而して、賣買を通じて社會的産物は數的表現を得るのであるが——それは結局、貨幣が一定の購買力、彼の所謂參與可能性 *Beteiligungsmöglichkeit* を有すると言ふ事になるのであるが——それは如何にして可能であるか。彼によれば、それは價值によつては決定されない。¹⁶⁾然らば價值と無關係に、如何にしてそれは決定されるか。此の問題は、彼によれば結局解決不可能なる問題 „das Problem der Wirtschaft“……das einzige…, an dessen Lösbarkeit ich nicht zu glauben vermag. と考へられる。¹⁷⁾而も此の問題を解決し得ないと言ふ事は、彼にあつては、彼の所説の弱點ではなくして、却つて、獨斷論——價格を價值の表現と考へ、主觀的評價強度から價格の高さが決定されるとなし、價值から數的表現に達し得るとなす所の獨斷論——を破る所の長所と考へられるのである。¹⁸⁾

これは、賣買の場合には、主觀的評價が、所謂交換の場合の様に、主觀的評價を異にする異種の諸財を通じて表現されずに、異量の同一財を通じて表現される——而も此の對立も彼が考へた様に絶對的なるものではなくて、相對的のものに過ぎない——と言ふ事に眩惑されたものに過ぎ

15) Elster, Karl: Die Seele des Geldes, Grundlagen und Ziele einer allgemeinen Geldtheorie. 2. Aufl. S. 18-20.

16) Elster, S. 54.

17) „ „ 52.

18) „ „ „

ない。

五 綜 合 說

數量説と生産費説とを綜合する所の學說の一つとして、假りに、父ミルをあげる事にする。

彼によれば、貨幣の價值が専ら其の量によつて決定されると言ふ事は自明である。だから、貨幣の量がどれだけ増減されやうとも、他の事情にして變化無き限り、商品の全體及び各部分の價值は、貨幣の増減と反比例に、下落或は騰貴する。若しも同一量の金屬が、鑄貨として、地金としてよりもより多くの購買力を有するならば、地金所有者はそれを鑄貨に替えやうと欲するであらう事は、自明である。かくして鑄貨の量が増加するに従つて其の價值は低下する、そして遂に金屬の鑄貨としての價值の、地金としてのそれに對する超過が、極めて少くなつて、もはや地金は鑄貨とされなくなる。若しも一定量の鑄貨の價值が地金としての金屬の價值よりも低いならば、鑄貨の所有者はそれを鑄壞して地金となすであらう。而して此の事は、貨幣の量の減少によつて鑄貨としての金屬の價值が殆んど其の地金としての價值に等しくなり、もはや鑄壞されなくなるまで續く。だから、貨幣の鑄造が自由である場合には、貨幣の量は常に金屬の價值によつて規定される。而して金屬の價值を決定する所のものは、他の一般的生産物の場合と同じ様に、生産費である。²¹⁾

即ち貨幣の價值は貨幣の數量によつて、而して、貨幣の數量は金の生産費によつて、決定され

19) Mill, James: Elements of political economy, 3. ed. 1826. p. 131.

20) „ „ p. 133.

21) Mill, 136-8. Mill, J. S. Principles of Political Economy p. 490-3, 499-501.

る、と言ふのである。然しながら吾々が既に明かに爲した様に、金の生産費自身が貨幣の量を俟つて決定されるのであるから、こゝでも循環論は免がれざるかに見える。然し此の點に關する簡明なる解答を、吾々はシユムペーターに見る事が出来る。即ち彼によれば「金の量が價格を決定するのみならず、理論的にはそれと同様に、價格が金の量を決定するのである、と言ふ事、貨幣の購買力即ち貨幣の價值が金の量によつて決定されると共に、金の量が貨幣の購買力によつて決定される、と言ふ事は、嚴密なる數量説の立場からでも認められねばならぬ。其の事は決して循環論ではなく、實に、經濟關係の分野に於ける所謂根本的均衡的相互作用の構成 *die Statuierung einer principieil paritätschen Wechselwirkung*」である。勿論茲に彼の所謂「金の量」とは、貨幣の量の意に解せらるべきであり、貨幣の量との關係に於いてのみ論せられたる事が、生産費との關係にまで及ばされねばならない。

或は、數量説と生産費説とは決して相容れざるものであるかの如く論せられる事があるが、それは實に斯かる關係の看過に由來するものである。

六 結 語

然らば、所謂根本的均衡的相互作用の構成とは如何に考へらるべきであるか。

今再び、さきに掲げたる例を援用するならば、そこでは、貨幣としての金の需要が3であるならば金の生産費は1であり、貨幣としての金の需要が27²⁰であるならば金の生産費は4.5であ

る。之を逆に言へば、貨幣となる金の量は、貨幣の購買力が1であれば3であり、貨幣の購買力が4.5であれば27/20である。之を一般的に言ふならば、新に貨幣となる金の量 $Go' - Go''$ は

$$Go' - Go'' = \frac{33K}{4} - \frac{21}{4} \dots \dots (14)$$

である。

而して今假りに、前期間より當該期間に受け継がれたる貨幣量をGとすれば、當該期間内に於ける、貨幣の供給量——それは均衡的規則的過程に於いては貨幣の需要量Q/Kに相等しい——は

$$\frac{Q}{K} = Go' - Go'' + G \dots \dots (19)$$

である。詳言すれば、一定期間内に於いて生産される金のうち貨幣となる所の額（これは必ずしも正数とは限らぬ、それは負数でもあり得る、負数の場合とは、一定の期間内に生産される金が全く地金としての用途の爲めに消費し盡され全く貨幣とならざるのみならず、更に、前期間から其の期間に受け継がれる貨幣の或る部分が、鑄壞されて地金としての消費にあてられる場合である）に、前期間から其の期間内に受け継がれたる貨幣量を加へたる額が、當該期間内に於ける貨幣の供給量である。

従つて、今假りに

$$G = 4 \dots \dots (20)$$

とするならば、貨幣の供給量は

$$\frac{Q}{K} = \frac{33K}{4} - \frac{21}{4} \dots \dots (21) = i \text{ 線}$$

である。今假りに此の場合、金の生産費が(9)式の如く低下するか、又は、地金としての金の需要が(12)式の如く低落するとするならば、新に貨幣となる金の量 $Go' - Go''$ は、始めの場合には、

$$Go' - Go'' = \frac{50K-5}{4} - (4-2K) \dots\dots (22)$$

なるが故に、而して後の場合には

$$Go' - Go'' = \frac{25K-5}{4} - \left(\frac{16-33K}{4} \right) \dots\dots (23)$$

なるが故に、何れの場合にも結局

$$Go' - Go'' = \frac{58K-21}{4} \dots\dots (24)$$

である(何れも同一の結果となつたのは、豫めかゝる場合を假定したからである)。従つて貨幣の供給量 $\frac{O}{K}$ は

$$\frac{O}{K} = \frac{29}{2}K - \frac{5}{4} \dots\dots (25) = (19) \text{に} (4) \text{を代入} = k \text{ 線}$$

である。

今斯くの如くして得られる貨幣の供給線に第三圖を組合はす時、我々は貨幣の價值決定に就いての所謂根本的均衡的相互作用が、何處に歸着するかを明かになす事が出来る。即ち $i-j$ 線の場合には

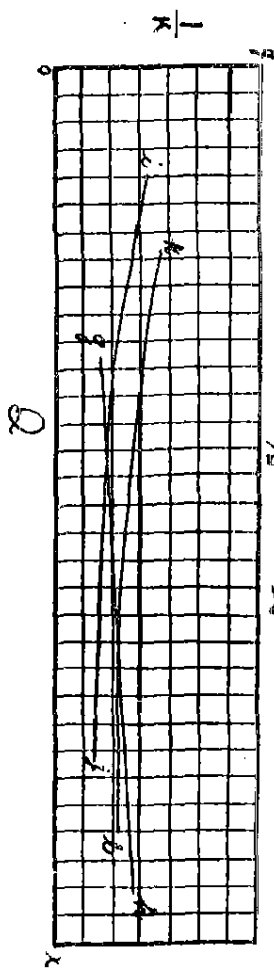
$$\frac{O}{K} = \frac{15}{K_2} - \frac{5}{K} \dots\dots (27) = g \text{ 線}$$

$$\frac{O}{K} = \frac{33}{4}K - \frac{5}{4} \dots\dots (21) = i \text{ 線}$$

$$K=1, 1016(\text{約}) \dots \dots (28) = (27) - (21)$$

となる。此の事は、すべての場合について言ひ得られるはずであるが、吾々の目的は計算其のものにあるのでは勿論無く、貨幣の價值決定原理の考察にあるのであるから、今算數の煩を重ぬるを要しない。之れを圖表を以て示せば次の如くなる

第四圖



以上は極めて限定されたる場合に就いての考察である。之等限定的諸條件の變化が、貨幣の價值決定に關して如何なる意味を有するや、及び、貨幣の價值が斯くの如くして決定されると言ふ事が、資本主義社會の根本的機構に於いて如何なる意味を有するや、等の問題については他日に譲らねばならぬ。本稿はそれ等の研究の爲めの、殊に後者の研究の爲めの準備に過ぎない。

(十月五日稿了)